

## 折々の記 No177 : 支那帝国崩壊の予兆！

(H23・7・28 記)

それにしても在り得ない大惨事が起きたものだ。年7月23日20時34分(北京時間)、浙江省温州市において、北京から福州に向かうD301号列車と、杭州から福州に向かうD3115号列車が衝突・脱線事故を起こした。両方とも同じ方向へ向かう列車であり、D3115が落雷に伴い停車していたところへD301が追突し、D3115の列車数両が高架橋から転落した。北京～上海の高速鉄道は中国共産党創建90周年に合わせて建設が急がれ、車体は日本、ドイツ、フランス、カナダの技術導入により、運行システムは独自開発したと豪語していた。

現時点での被害は、死者39人、負傷者190名以上であると報道されている。行方不明者が居ないのは不可解であるとの報道も一部にはあるが、…



中国が威信をかけて建設した赤い超特急の棺桶が追突事故を起こし、原因究明を行うことなく列車の運行を再開し、事故原因究明に必須の事故車両を穴に埋めてしまう。批判が起これば、慌てて掘り起こすということをする。賠償金を支払って口を封じようとする。何たる野蛮な国か！！

- ①中国政府は50万元(600万円)の賠償で死者1人の遺族と大筋合意と報道されたが、これに対して、インターネットやマスメディアが一斉に批判記事を掲載した。
- ②事故後の対応に不信感をもつ遺族や関係者は温州市政府前や鉄道省に対して座り込むなどの抗議行動を行った。鉄道省の記者会見での記者の怒りは今まで見たことがないものであった。
- ③事故後の24日、当局が「すでに生命反応はない」と断定した車両の解体撤去中に、幼児が救出されたこともあり、「人命軽視だ」と当局の姿勢を非難する声も上がっている。
- ④政府は、中国メディアに対して、独自取材をしないように指示した？
- ⑤本事故以前にも数々のトラブルが発生していた。
- ⑥落雷による停電が事故原因であるかのような当局説明に納得しない者が多く(日本では落雷により自動列車停止装置が作動するようなことはあり得ない)、人災ではないかとの声も上がっている。追突された列車の運転士は停車を命ぜられたと話しているようだ。

中国国内で政府批判が燎原の火の如くに広がりつつあるようだ。マスコミも挙って政府批判の狼煙を上げている。

中国版新幹線は、来日した鄧小平が我が国の新幹線の乗車したことに端を発し、何でも世界一を目指して建設に狂奔してきた。世界最速の350Km/Hの営業運転、政界最長であると喧伝してきた。日本、ドイツ、フランス等の技術の寄せ集めであるにも拘らず、自主開発であると強弁し、果ては特許の申請を行うとまで強気を崩さなかった。然しながら、速さを重視する余りに安全性を無視しているとか、鉄道建設に関連して大規模な汚職があり、手抜き工事も指摘され、去る2月には鉄道部長が餓首されてもいる。今までは、政府の弾圧と情報統制により共産党一党独裁体制を維持してきた。貧富の格差、役人の汚職或いは少数民族問題、等々に起因して頻発した暴動はこれまでは、力によって抑え込まれてきた。状況によってはトカゲの尻尾切りをして共産党への批判が及ばないようにしてきた。その方法がこれまでは確かに成功した。

今回は鉄道省に批判の矛先を向けさせているようだ。然し、トカゲの尻尾切りで国民が納得するだろうか？一旦覚醒した国民の共産党に対する批判は収まらないだろう。今までとは何かが違うようだ。中央政府の威信が落ち、威令が行われていない、政府当局への批判もある程度は許されるとの認識が醸成されつつあるのだろうか。一步の譲歩が

さらなる譲歩を引き出し、やがて雪崩を打って大崩壊が始まるのだ。今まで何とか封印していたパンドラの箱が開けられたのかも知れない。情報統制が聞かなくなった独裁国家は脆いものである。ソ連がそうであったように。

この状況をどう認識すべきなのだろうか？大支那帝国崩壊の予兆と云ったら言い過ぎだろうか？

思い出すのは、ベルリンの壁崩壊に伴うあっけないほどのソ連帝国の崩壊の姿である。一寸した誤発表により民衆が出国を求めて殺到し、それに対して警備当局が為す術がなかったのである。中国はもはや天安門事件と同様の強圧政策は採り得ないだろう。中国中央政府のガバナビリティが低下して、民衆がそのことに気付いたならば、反政府の火が燎原の火の如くに燃え上がるかもしれない。あっけないほど容易に支那帝国は崩壊する、そんな気がしてならない。

何れにしる、暫くは中国から目が離せない。中国 3000 年における支那大陸における帝国の興亡、栄枯盛衰、その歴史的瞬間に立ち会えるかもしれない。